日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY SOCIETY OF JAPAN

第68号（2010年９月１日）

発行者　〒192-0393 八王子市東中野742-1　中央大学11559研究室 日本ハーディ協会

編集者　〒811-1362 福岡市南区長住7-32-21　　浅田　雅明

渡りの女職人が子供を取り上げてもらうはずだったMother Leeが息を引き取った町Glaston（実名・Glastonbury）のMarket Place.

（*A Trampwoman's Tragedy*　1969. 08. 29.　小田　稔氏 撮影）

ハーディ夫妻の新婚の家――サービトン（1874-75）

鮎　澤　乗　光

ハーディの伝記的事実の中で、ロンドンでの生活については知られていないことが多い。その中で、ハーディとエマがパリへの新婚旅行から帰国して、最初の５ヶ月半を過ごし、*Far from the Madding Crowd*の単行本をスミス・エルダー社から出版し、あわせて、*A Hand of Ethelberta*を書き始めたSurbitonの家については、その所在や、何故ハーディ夫妻が新婚生活の場所としてこの家を選んだのか、など幾つかの不明な点があった。

例えば、『ハーディ伝』には、大陸訪問後、一時的にサービトンへ行き、そこにしばらく住んだ、としか記述がない。この家から出された最初の手紙（スミス・エルダー社へ宛てた1874年10月９日の手紙）の住所は、St. David's Villa, Hook Road, Surbiton. S. W.となっている。F. E. Hallidayの*Thomas Hardy: His Life and Work*(Adam and Dart, 1972)には、夫妻は1874年10月初旬、テムズ川南岸の快適な住宅地で、ロンドンからほぼ12マイル西にあるサービトンに落ち着い

た、とある。Robert Gittingsは*Young Thomas Hardy*(Heinemann, London, 1975)のなかで、ハーディ夫妻が74年10月６日までに、St. David's Villa, Hook Road, Surbitonに居を構え、その日、ある人物の訪問を受けたことを記している。これがエマの父John Attersoll Giffordであり、彼はこの時、エマの従兄Robert Giffordの娘Annieを同伴していた。ギティングズはこの訪問者の特定を、ハーディ夫人の10月６日、火曜日の日記の次のような内容に求めている。「St. David's Villa—Surbiton—午後５時、アニーとレトリヴァー犬が庭でパパと遊んでいた。」さらに、ギティングズはサービトンはお上品な住宅地だが、ヴィクトリア朝時代の中流階級の父親にとって娘夫婦の最初の住居として満足できる場所ではなかった、と付け加えている。Michael Millgateは*Thomas Hardy: A Biography*(Oxford U. P., Oxford,1982)で、以上のような事実に加えて、夫妻が引っ越してくる前からこのvillaに住んでいたWilliam David Hughesという人物の名を上げている。また、エマの日記の内容についての先のギティングズの記述に関連して、こう述べている。彼らがこの家についた10月６日の午後、エマの父はすでに庭で、若い親戚（アニー）と大きな犬と一緒に遊んでいた。エマは、どういう経緯で、結婚式にも出なかった父がここに来たのか、また、彼らがこんなに遠い郊外に何故住むようになったか、については何も記してはいない、と。

以上の概略から、ハーディ夫妻は２週間のパリへのハネムーンの後、1874年10月６日、サービトンのフック街にあったセント・デイヴィッズ・ヴィラという家に新婚の居を定め、その後５ヶ月半をそこで過ごした。そして、エマの日記にあるように、父が従兄の娘アニーと大きなレトリバー犬と遊んでいるのを見ている。さらに、この家にはすでにウィリアム・デイヴィッド・ヒューズという人の家族が住んでいた。しかし、これらの事実からは、この家の正確な所在とその間取りなど、何故ここに夫妻が居を定めたのか、エマの日記の記述の真実、何故父がこの家を訪れたのか、等々のことが不明のままである。それが、2006年に出版された２冊の本によって、より明確にされる。まず、どちらが先に出版されたか分からないが、Ralph Piteの*Thomas Hardy: The Guarded Life*(Picado,2006)では、「４つのベッド・ルームを持つ一戸建ての家を小さな娘のいる別の夫婦と共有した」となっている。そして、著者はサービトンがロンドンのウオータルー駅からドーチェスターまでの鉄道の途中駅であったことから、ロンドンに近く、また故郷に帰るにも便利なこの家が住居として選ばれたと推測し、さらに、サービトンにはハーディとほぼ同じ歳で、同郷の音楽家Frank Honeywellが住んでいて、彼がウェイマスにいた頃からの旧友であったハーディにこの家を紹介した、と指摘している。パイトはそれらの事実のソースを示していないが、Claire Tomalinは*Thomas Hardy: The Time-Torn Man*(Biking, 2006)のなかで、サービトンの交通上の便利さと、この家の間取り(a new-double fronted house with two stair-cases, a cellar, a carriage drive and a garden)、さらにハーディ夫妻がこの家をヒューズという引退したビール醸造人一家と共有していたこと、彼はウェイマスでハーディが知っていたある人物の友人だったこと、さらにヒューズ家には夫婦の他、小さな娘と犬がいたことを指摘し、その上で、トマリンはこれらの事実のソースとして、注の形で、Mark Davison's booklet *Hook Remembered Again*(2001)を明示している。

筆者は数年前にこの冊子をサービトン在住の友人から送ってもらい、通読して放っておいた。最近ふと気になって、この冊子を読み、次のような記述に出会った。その著者と彼の協力者であり、研究者仲間である Colin Prendergast（彼はロンドンのthe Family Records Centreで働いていた）は仕事のない時間を使って、２年間を費やし、ハーディのlandlord or flatmateであったWilliam David Hughesなる人物の特定を行うため、様々なCensus, 各地の図書館、選挙人名簿、cemeteryなどの調査を行い、古い資料や、old Hook housesの歴史をあさり、ペンザンスやヘイスティングズ、ダブリン、オックスフォードなどへも資料収集の手を延ばした苦労の末、この家の所在を明らかにした。St. David's Villaは、後にHolmbury Cottageと改名され、それから、13

Hook Roadとなった家で、1906年に取り壊され、現在は、Midhurst Court Flatsがその敷地に建っている。この冊子にはまた、1874年に写されたこのヴィラの正面からの写真と、間取りと庭の紹介と、1908年のこの家のオークションの広告が載っている。さらに、本書では、ハーディのウェイマス時代からの旧友の名前はパイトの本にあるFrankではなく、Francisとなっている。さらに興味深いことに、デイヴィソンは、エマの例の日記の内容に言及して、次のように想定している。現在まで、ハーディ研究者たちは、このアニーという小さな娘をエマの若い従妹と考え、「パパ」をエマの父親と同一視していた。しかし、二人の結婚に強く反対していた父親が、新婚の二人を訪問するため、コーンウオールから上京して来るはずはなく、実はアニーはウィリアム・デイヴィッド・ヒューズの娘アニー・ヒューズで、「パパ」は単にこの少女の父親のヒューズ氏であったことは「確かなように思われる」と。こうして、デイヴィソンはハーディとジョン・ギフォードのつかの間の和解を否定しているのである。

このように、デイヴィソンの小冊子は、フック街の歴史的諸事実を写真入りで記述する中で、ここではこれ以上書くことはできないが、上の事実の他にもハーディ夫妻の住んだ家について様々な（些末かもしれないが）興味深い発見を紹介している。二人の郷土史研究家が、サービトンに５ヶ月半住んだ文豪の家を突き止めた好奇心と執念に頭が下がる。

バーンズとハーディの詩から ― 風景と人物

小　田　　稔

日本語を含め、総67種類という多岐にわたる言語から原理を引き出して書き上げた*A Philological Grammar* (1854)をハーディは知っていたし、また、*Poems of Rural Life in the Dorset Dialect* (1862)も読んでいた。そのハーディが、作品138点を選んで編んだ*Select Poems of William Barnes*(1908)の『序文』の中で、バーンズが単なる韻律技巧家に堕するのを救っているものとして、語彙のほかに、風景と人物の描写を挙げている。

バーンズのブラックモア・ヴェイルは、信じられないほど美しい。*Thoughts on Beauty and Art*(1861)によると、神は万物に「何の過不足もない」美を与えたが、その美が無傷の状態に留まっていることは極めて稀である。芸術家の務めは、「傷ついている」ものの中から「失われてしまった」美を拾い上げて純粋な形で世人に示すことにある、とバーンズは考えているから、バーンズの作品が信じられないほどの「至美」を満載するのは、当たり前だ。このような芸術活動の所産として忘れがたいものの一つが、例えば、対照的な色彩による叙景である。黄色と黒、白と赤、白と緑など、事例は多々あるが、バーンズが叙景対象の清らかさと、うららかさと、調和を表す色彩として最も大切にしたものが、白と青である。*Orra: A Lapland Tale*の「青い眼」と「雪」、*The Water Crowvoot*の「雪白の蕾」と「空色の小川」、*Zummer Stream*の「白い雛菊」と「紺碧の空」、*Not Sing at Night*の「澄んだ青空」と「雪色のリンネル」など、枚挙に遑がない。タイトルそのものが象徴的な*White an' Blue*では、乙女の瞼と眼、雲と空、白亜の土手と小川、スカートとジャケットなど、すべてが白と青で染め抜かれ、「美しいもの」には「よろしきを得た」調和が保たれている、というバーンズの理念が小気味よく反映されている。

しかし、単なる叙景よりももっと印象的なのは、風景と同化しているドーセットの「善良な人たち」(*Praïse o' Dorset*) の描写である。乙女たちは春の草花とともに芽を出し、花を咲かせる。その乙女たちを見ていると、幸福感が「芽を吹き、花を咲かせる」(*Blackmwore Maidens*)。その上、ブラックムアの人たちは、与えられた仕事と暮らしに満足している。大きな土地は望ま

ず、労働が人の心を善良にしてくれる、と天真爛漫に信じて疑わないリチャードは、「蜜蜂のように歌いながら」農耕に勤しんでいる（*Eclogue: The 'Lotment*）。*The Work Buoy o' the Farm* の主人公は、馬の鞭を「王笏」のように持ち回り、家畜や家禽の世話も厭わない。乳絞りのポールは、「雲雀」とともに目を覚まし、「露の降りた草」を踏む。太陽が西の丘に傾くと、牛のそばで歌を口ずさむ。牛が乳を搾るポールの邪魔をするようなことは、決してない（*The Milk-Maid o' the Farm*）。男女の愛の営みも、平穏に紡がれる。男たちは満足できる乙女をブラックムアの川のほとりで探し出すことができる。*In the Spring* の主人公が春に結婚したいと思っている「恋人」の肌は「ジャスミンの花」のようだし、眼は「露の滴りのようにきらめいている」。そして、その乙女の髪を「野ばらの蕾」で飾り、「雛菊の白い花」で「ふしど」を拵えてやりたい、と思っている。目を疑いたくなるほど牧歌的なエル・ドラードである。

W・R・ラットランドによると、ハーディはバーンズをすでに10歳代から読んでいる。バーンズがウィンタボーン=ケイムに聖職禄を得てからは、しばしばコッテジ風の牧師館を訪ねた。1879年、*New Quarterly Magazine*に匿名でバーンズ評を掲載したハーディは、バーンズの人柄の誠実さだけではなく、詩人としての才能も「議論の余地はない」としている。1886年10月、バーンズの葬儀が行われた日には、先輩詩人の韻律技法を取り入れた別れの詩*The Last Signal* を書き、同年同月*Athenaeum* に掲載した追悼文では、「尊敬すべき」「詩人･言語学者」であるバーンズの死は、「すぐれた天稟」だけではなく、英国田園生活の過去と現在を結ぶ「最も興味ある絆」の喪失でもある、と述べ、更に、トマス・H・ウォード編の*The English Poets* (1918) 第五巻『緒言』では、バーンズは詩歌の「第一義的な素材」である「人の心情」を認知する「明晰な直覚」の先天的な持主であった、とまで絶賛している。こういうハーディであるから、二人の詩人の間には深刻な接点がある筈だ、と考えたくなるのだが、実はそうではない。

ハーディが風景の色彩に対して鈍感であったとは言はない。*Beeny Cliff* では「乳白色」や「瑠璃色」をした海原に出会う。*To Outer Nature* には、「人生が明けそめた頃」に見たという「アイリス色の虹」もある。しかし、バーンズの詩に描かれているような華麗な色彩の協奏は聞かれない。ハーディの風景にはまた、バーンズ的な清澄、静謐、平和がない。*Wessex Heights* は静かな瞑想と思索を保証してくれる「ある情け深い手によって」造られているように思われるが、イェラムの森は、〈生〉の目的は拒絶と挫折にある、と語る（*Yell'ham-Wood's Story*）。雑木林から「ある祝福された希望」を囀る鶫の声が聞こえてくる（*The Darkling Thrush*）けれども、ハーディが目にする風景は、おしなべて、「顔は暗く、苦しみでやつれている」し(*Nature's Questioning*)、「〈天〉の輝かしい光景」が消え失せてしまっている（*A Meeting with Despair*）。

ハーディの世界にはまた、風景と人物によるバーンズ的な楽園を期待することも不可能だ。ハーディのミルクメイドは不幸な星の下で生まれている。牛の腹に額をつけているフィリスは、一見、ブラックムアの「生命、情趣、精髄」の一部となっているように思われるけれども、つぶさに見ると、彼女の眼は「苦痛」に溢れ、「涙」をこぼしている。フィリスの心は愛の葛藤に巻き込まれ、ずたずたに切り裂かれている（*The Milkmaid*）。羊飼いの少年が目にする「雲の柱」は、神の恵みを運んできてくれない。野の蜜蜂を追い出し、ヒースとカイト丘の輝きを消し去っている（*The Sheep-Boy*）。自分が石を積み上げた大邸宅のお陰で、持主は風雪を凌げるようになったが、建設中に抱え上げた大きな石のお陰で背中を捻挫してしまった石工は、「生涯尽きることのない痛み」を凌ぐことができない（*The Old Workman*）。ハーディが描いた多くの人物の中で、満ち足りた人生を送っているのは、仕上げた土の山を眺めながら、「これから先も長い間」仕事が払底することはあるまい、と、稼業の繁盛を喜んでいる墓掘りだけだろう（*The Sexton at Longpuddle*）。

ハーディはバーンズに満腔の敬意と親愛の情を寄せていた筈なのに、二人の間に何故このよ

うに隔たりが発生したのだろう。考えられる理由一つは、万有をめぐる二人の認識の違いである。神への深い信仰を生涯堅持したバーンズにとっては、風景と人物は、ともに、神が自分の被造物を見て「よし(good)」とされた『創世記』的な美の権化である。作品に展開されている世界が、余りにも現実離れした、天上的な理想郷となっているのは、このためである。一方ハーディは、エンジェル・クレアのように、「震われたもの」の除去を考えているし、『39箇条』（*His Majesty's Declaration*）の第４条を「文字通り、字義通りに」受け入れることができなかった。ハーディの作品にバーンズ的な「至美」に彩られた世界を期待するのは、所詮、無理なことである。

今一つの理由は、作品の発信内容に普遍性があるかどうか、という視点から捉えることができる。バーンズはブラックモア・ヴェイルと、そこで生計を営む人たちを描いた。ヴェイルの風景には一点の汚れもない。ヴェイルの人たちが野心を持って何かに挑戦することはないし、したがってまた、ヴェイルの外で暮らしている人たちの心を、日夜、間断なく痛めつけている激しい情念や知的苦悶に苛まれることもない。彼らは限りなく幸せだ。作者自身が偏った視点から世界を眺め、ヴェイルの内外で渦巻いている筈のどろどろしたものに目を向けようとしない。ここに、ほとんど欠点とも言えるバーンズの地方性が浮上してくる。

一方、詩作の目的を眼前の事物によって誘発される感情や思想の記録という点に置いていたハーディは、ブラックモアを含むウェセックス全般に目を向けながら、心はウェセックスという限られた地方を越えた所にも注いでいた。ウェセックが提供する素材をシンボルとして用いながら世界に遍在している美と醜、哀と楽をつぶさに描き、そうすることによって、生の意味を頑固に問い続ける文学を目指した。ハーディの作品からは、安らぎを求めようとする願望と、その安らぎを獲得しようとする力との間に立ちはだかる、大きな均衡の欠如によって引き起こされている魂の痛みも、鮮烈な残響として聞こえてくる。

この意味において、バーンズとハーディをともにドーセット詩人と呼ぶことはできない。方言の苦手な読者を意識した*Poems of Rural Life in Common English*(1868)をもってしても、ハーディと並べてみると、バーンズがアナクロニズム的な存在に見えてくるからである。

田舎の歴史の可能性―レスターで考えたこと

金　子　幸　男

昨年８月より一年間レスター大学ヴィクトリアン・スタディーズ・センター（以後VSC）のヴィジィッティング・フェローとしてお世話になっていた。VSCは、英文の先生方の中でも、ライフ・ライティング、女性文学、文学と医学や科学との関係を扱っている先生方を中核に、歴史、美術史の教員が集まって構成されている学際的なところである。滞在中、ハーディ研究について考えるところがあったので、それについて書いてみたい。

今回の研究テーマは、ハーディを、田舎について書いた同時代の作家たち、Richard Jefferies, George Sturt, Flora Thompson その他の中に位置づけようということであった。ところがこちらへ来て個別の作家を読む前に、田舎の知識が不足していることを痛感させられた。田舎といっても、地域差が激しく、一つの田舎ではなく複数の田舎が存在し、農業史や教区の知識がないと田舎の作家たちを深く味わうことができないのではないかと考えるようになった。VSCの中ではローカル・ヒストリーがご専門のK.D.M.Snell先生の ”Regional Societies”, “Regional Cultures” というMAの講義的なセミナーに出て自分の無知を実感。この先生は日本語のいくらか話せる先

生で、その授業たるや頭の中をひっかきまわされるような素晴らしい授業であった。ご本人は何度か、岩手県で夏の間農場体験もされたとか。日本の歴史にも通じており、日本文学も翻訳だと思うがよく読まれていたようで、太宰、谷崎その他の日本のregional novelistsに関心があるようだった。ハーディの長い緻密な論文もあり、今新たなハーディ論を準備中で全作品を再読しているとか。

この先生から学んだことをいくつか思い出しながら列挙してみよう。だいたい18世紀から19世紀の田舎・農村の状態の記述と思ってもらっていい。

・ファミリー形態は、昔から拡大家族ではなく、核家族が主流。したがって、老齢の親は子供に面倒をみてもらえないので、教区レベルで制度的な福祉制度を成立させないといけなかった、それが今のNHSの前身になっている。

・大雑把にいえば、イングランドを東北から南西に横断する線の北側は牧畜地帯、南は農耕地帯。ただし北のノーサンバーランド州は農耕中心。ちなみにここは、農業と鉱山業が相互補完的な関係にある。鉱業に従事している農業労働者を抱える地域がイングランドには少なからずあるので、鉱業労働者と農業労働者はセットで考える場合もある。さてパストラル地帯よりも農耕地帯のほうが、人手がいるので、in-migration/out-migration という労働者の移動が国内で生じる。もちろん近所の女性労働者や子供が手伝う場合もよくあった。イングランドの外から、たとえばアイルランド人労働者がやってくることも普通であった。彼らはリバプールへ上陸後、ミッドランドを横断して、イングランド南東部へ出稼ぎ労働者として移動していった。しかもアイルランド人労働者は途中で病気になると、病院で休んだ。その病院とはカトリック修道院。修道士はほとんどがアイルランド人。ちなみに、アイルランド人の平均身長は、イングランド人よりも少し高い。なぜなら、主食のジャガイモは栄養価が高い食べ物だったから。また、ヨークシャーやノーサンバーランド、南ウェールズへ向かった者たちもいた。ヒースクリフのことが思い出される。

・イングランドを東北から南西に横断する線の北側は農場が点在する形をとり、いわば農場が共同体であるのに対して、南はいわゆる村単位で農業をするということ。これが分かると『サイラス・マーナー』のラビローが村である理由が分かり、『嵐が丘』では不思議と二つの大きなお屋敷の存在感はあっても、村の匂いがしない理由が分かる。

・田舎の社会は、landowner, tenant farmer, living-in servant & farm labourerから構成され、女性ファーマーの存在は珍しくはなかった。これでバシシバが特殊な例ではないことが分かる。カントリーハウスに住んでいるのは国教徒だけと思い込んでいたのだが、カトリックのlandownerも珍しくはなかった。これで『ブライズヘッド再び』のマーチメイン家がカトリックである理由の一端が理解できた。用語の問題としてliving-in servant は独身者をさし、結婚してfarm labourer となる。これも目からうろこ。

・教区の所属はどこで福祉を受けられるかという資格（settlement）やそれを財政的に支える教区税の問題と重なっており、どこの教区もよそ者がいついて、その教区のsettlementの資格を得ることには神経をとがらせていた。資格を得られる条件にはいくつかある。たとえば、よその教区の所属だった未婚の者が別の教区で農場労働者として１年間働くと、そこの教区のsettlement の資格を得、その教区から福祉を受けられる。従って農場経営者は11カ月で雇用契約を打ち切るなどのいやらしいことをした。この１年条項は1834年の新救貧法により廃止。かわって財産のあるなしがsettlementの条件になっていった。他に、私生児は生まれた教区の所属となるため、独り立ちできるようになるまで、教区で面倒を見なくてはならなくなる。したがって臨月を迎えた未婚の女性は、他の教区の境界まで引っ張って行かれて別の教区へ追いやられた。教区は今でいう国家のような働きをしていて、外国人嫌いならぬ、よそ者嫌い

（local xenophobia）が生じやすかった。

・新救貧法の下でも、院外救済は一律に廃止されたわけではない。特にイングランド北西部のほうは中央のコントロールに対する抵抗が激しく、ウェールズあたりはほとんど全域で新救貧法に抵抗した。それが一番うまくいったのはイングランド南東部の耕作地帯であった。

以上のような知識があるとこれまで小説の中で読み逃していたことが見えてくるのではないだろうか。田舎の農業史、社会史を勉強すると見えてくるものがあるのではないか。しかもこれはハーディ以外の作家にも適用することが可能ではなかろうか。たとえばサウス・カントリー、ミッドランド、ヨークシャー、コーンウォール、カンバーランド、イースト・アングリアなどの地域に密着した作家を探してくれば、複数の田舎の知識が読みを深めるところが見えてくるのではないか。さらにロンドンという都市地域にこだわったregional novelistと対比してみても面白いかもしれない。この一年間は概説的な知識の蓄積に費やした１年だった。個別の作家の読みはやっと始まったばかりである。

ここからはUniversity of Leicesterの雰囲気について。フェローに対しては、勝手に研究をやって手間をかけないでくれというのがイギリスの大学の先生の気持ちだろうが、この大学は親切でホスピタブルだった。親日的で日本へ行かれた先生方も多いと聞いた。日本の大学との交流を積極的に進めており、日本との共同研究者を求めているということもあったかもしれない。センター長だったホストのJoanne Shattock先生が本当にチャーミングな素晴らしい先生で細かく気を使ってくださった。今は退職されたので、supervisionを含むteachingを担当されているだけのようだが、後任のセンター長はGail Marshallという若い女性の先生だった。*Cambridge Companion to the Fin de Siecle*の編者である。同時期に私以外に２人の女性日本人フェローが来ていたが、シャトック先生は学部長のTallack先生の協力を得て、共同研究室を私たちのために獲得して下さった。これは図書館で疲れたときには大変助かった。これが当たり前ではないということは他大学のフェローの事情を知っている方なら言うまでもないだろう。ちなみに女性二人とも脚が速くて私はこの一年間、その背中を見ながら走っていた。さらにフェローといえどスタッフの一員ということで一人一人の個別のHPを作ろうと提案されたのは英文学科長のHalliwell先生であった。これは一面恥ずかしくもあった。また大学のプレスの記事には家族写真入りの記事が掲載された。「日本人フェロー来る」である。何とも気恥ずかしい。スタッフとの距離が近く、外部研究者を招いてのセミナーという形の発表会の後いつもスタッフと一緒の食事に連れていってもらった。私は特に指導は求めなかったが、どの先生も何かアドヴァイスが必要なときには喜んで応じてくれたであろうと思う。そういう雰囲気を漂わせている先生方が多かった。聞けるレベルまでこちらの準備ができていないと私のほうが遠慮をしてしまったのが今から思えば残念。副学長兼学部長のTallack先生は、何か書きあげたら専門分野は違うけれども見てあげようと言ってくださった。その他、ここの先生方は、自分の専門分野に近い先生も紹介してくださる。それから「カントリーハウスとイギリス文学」というMAの授業にも出たが、フルに貢献を求められたので準備が大変だった。これも、授業では発言しないでくれと言われたという他大学のフェローの例を二、三知っていたので意外だった。セミナー活動はどのセンターも活発で垣根が低く風通しがよいので、分野の違うところのセミナーもよく聞きにいっていた。どこでも教授が率先してワインなどの飲み物をついでいた。壁が低くフレンドリーというのは本当にいい。学外の一般聴講者もたまにいた。ちなみに、VSC以外のセンターが提供する授業も二度ほど出た。ものすごく融通がきく。図書館は、オープンシェルフの雑誌コーナーがすばらしい。手にとってその場でデジカメで撮ることができる。数年で消えてしまったような19世紀の雑誌類もあった。PCを使ってのオンラインデータ検索やリソースへのリンクも、19世紀の新聞が多量に

入っているデータベースを筆頭にすばらしく、日本の私の大学のデジタル情報へのアクセス環境と比べると絶望感を感じてしまう。英文専門の図書館員の方もお願いすると丁寧に検索のテクニックを教えて下さった。２年前にユニヴァーシティ・オブ・ザ・イアーを獲得し、学生満足度でも第一位を取っただけのことはある大学だと思った。学生だけではなくお客さんに対するホスピタリティもよい大学であった。ベンチ・フィーもほとんどかからなかった。その他、レスターはロンドンまで１時間少々なので、日帰りも可能だし、家賃もロンドンの半額以下、多民族共生のモデル都市だそうで、インド人、パキスタン人をはじめとして有色人種が多いことも私にとっては魅力だった。観光都市であればなおよかったろうにという声もあるかもしれないが、住めば都である。センターを少し離れれば緑豊かな田舎が広がっていた。国際センターのシニア・オフィサーは、今後も連絡を取れるような先生方とのパイプが築けましたかと気づかってくださった。このような人間味のある大学の情報は、公にして今後行かれる方の参考になるかと思うのであえて書かせていただいた。

ヴィクトリア朝小説、翻訳ことはじめ

今　村　紅　子

平田禿木（1873～1943）は、島崎藤村や北村透谷とともに「文學界」の同人であったことで知られますが、一高を退学し転じて東京高等師範英語専修科を卒業（明治31年）し、後年は英文学者、翻訳家、またエッセイストの道にすすみます。小文ではそうした英文学者、翻訳家としての禿木の輪郭を改めてとらえなおしておきたいと思います。

明治39年にオックスフォード大学の留学を終えて帰国した平田禿木は、明治40年から42年にかけて学習院女子部に勤めたのを皮切りにして、昭和９年から16年までは法政大学に出講し、そのかたわらヴィクトリア朝を中心とした英文学作品の翻訳と紹介を精力的におこなった人物としても知られています。

大正３年には國民文庫刊行會よりウィリアム・メイクピース・サッカレーの『虚榮の市』を翻訳しました。その序文で禿木は、ヴィクトリア女王が即位した年の英国の様子を記しています。北部バーミンガム、シェフィールドといった工業都市の発展、都市における中産階級の台頭、活気ある社会環境のなかに現れた癇に障るおかしな紳士気取りの人びと―いわゆるスノッブの登場についての言及です。そんな人びとの生きざまを描いたサッカレーの『虚榮の市』を禿木は絶賛します。虚栄と偽善とおかしさを完膚なきまでに暴露したのがサッカレーであったというのです。

大正14年に手掛けた翻訳が、チャールズ・ディケンズの『デエヴイツド・カツパフイイルド』（國民文庫刊行會）です。ディケンズについて禿木は「貧に苦しみ、病に泣いてゐた當時の下層の社会を、裏に涙をひそませて、表に面白ろ可笑しく描き出した」人物であると説きました。ヴィクトリア朝を代表する作家たちの大作をつぎつぎと翻訳した禿木が、ハーディに対して感じていた思いとはいかなるものだったのでしょうか。

禿木はハーディの代表作『テス』の翻訳を國民文庫刊行會より大正15年に出版しました。翻訳活動のかたわらハーディの生涯をたどって、この小説家の素地を建築家事務所での修業時代に求めました。「古い寺や荘園の修理の用意にと、寫生（スケッチ）の手帳をもって草を分けては人里離れた御堂のくづれ、由緒正しき舊家の廢邸を寫してまはり、彼はドオチエスタア近くのあらゆる小路、あらゆる草原、小流、あらゆる墓場を暗じて仕舞つた。彼の地方の路傍に咲く何の野花をも、空に

出る何の星をも知てゐると云われてゐる位である」と『英國近代傑作集』の「序」に記しています。事物の正確さ、量や均合に対する緻密な観念、物全体から来る美しいハーモニーに対する敏感さは、ハーディの建築家として素養にあったと考えたのです。さらに、その建築的な正確さが顕著なのは『テス』であると指摘します。また『テス』にはまるで漢詩の絶句のように承があり転結があり、伏線があり、それに応ずる照応があり、秩序整然として、ゴシック式の大伽藍を見るようであるとまで言っています。一層一層とその組立てがあまりにもきっちりとしているというのです。

19世紀末のイギリス小説は著しくフランスの影響を受けていました。フロベール、ゾラなどの自然主義、写実主義の強い刺激をそのまま受け継ごうとする作家もいました。ところが、そういう自然主義、写実主義の精髄をよくのみこんで、充分咀嚼消化し自分の物とした上で、ハーディはイギリスの自然、生活を見直して作品に映しだしたと禿木は評価します。都会や上流社会を離れて、素朴な田舎の農民の生活やその心境に立ち入って、大胆に卒直に描ききったというのです。

ハーディは、昔のアングロ・サクソン時代の古い名称にしたがって、ウェセックスと名づけた地方を作品の舞台としました。そこでの農民の生活、野心、嫉妬心を、今までにはないほどに大胆に赤裸々にかつ微細に描きました。禿木は、ハーディ作品ほどローカルカラーが鮮やかに出ている作家はないと考えました。「所謂ウエセツクス地方として、彼の小説の舞臺となつたのである。英國の小説家で、所謂地方の色彩なるものを、ハアデイほど繊細に、眞摯に、強烈に深刻に描いたものはあるまい。ハアデイの描いた世界に架空の世界などない。一々皆眞摯の観察にもとづいた生きた描寫などである。ハアデイの作品を読むに當つて、何よりも先ず我等の心を惹くのはこれである」（平田禿木「序」『英國近代傑作集』）

禿木は、ハーディの長編作品ばかりではなく短編作品も評価しています。ハーディの短編は、いわゆる短編といってもH.G.ウェールズなどが得意としたanecdoteではなく、むしろ「モーパッサン式の深刻な意義を込めたもの」でした。その短編集のひとつ「人生の小さな皮肉」という言葉がよくその内容を物語っています。「ハーディの人生観は飽くまで暗黒である、皮肉」であり、ギリシア悲劇作家のように人間の生きざまを崇高に荘厳に作品世界では表現しています。しかし、短編作品は長編ほどに「深刻なものではないが、そうした人生観は至るところに漂っているのがみえる。ただそれとなく漂っているためになおさらいたいたしい痛切な思い」がこめられて、短編特有のユーモアや人生の皮肉が凝縮されており、大きなカンバス（長編小説）に成功したハーディは、短編においてもまた一境地を占めうると評価したのでした。

明治期の英国留学とは比較にならないほど現代ではイギリスが近い時代となりました。来年度、さいわいなことにわたしは在外研修でケンブリッジ大学で英文学の研究をする機会を与えられました。わが国の英文学研究草創期にあたる平田禿木の時代に思いをはせながら、ハーディばかりではなく最新のイギリス文学や文化をたくさん吸収してきたいと思います。イギリスにお越しの際には、ぜひケンブリッジにもお立ち寄りください。

ハーディと私

高　橋　暁　子

私が初めてトマス・ハーディの名前を耳にしたのは、大学に２年次に受講したイギリス文学史の授業の中ででした。文学史上に残る彼の代表作の一つ『日陰者ジュード』のあらすじを聞き、

酷く暗くジメジメした物語だと感じつつも、私の中に妙に引っかかる感覚が残りました。同じ年次に受講していたイギリス小説の授業でも『ジュード』が扱われ、ハーディの妙に引っかかる感覚が更に頭から離れなくなりました。

この妙に引っかかる感覚、小骨が喉に刺さったような感覚を分析してみたいと感じるようになり、３年次にはハーディ作品を中心として扱うゼミに参加することに決めました。ハーディと同時代の作家ディケンズの『大いなる遺産』や、ハーディの影響を多大に受けた近代の作家ファウルズの『フランス軍中尉の女』などオープン・エンディングを持つ作品を扱ったこのゼミにおいて、『帰郷』もオープン・エンディングを持つ作品の一つとして取り上げられました。その結果、また一歩、私のハーディへの想いが前進することになりました。この年、同時に「堕ちた女性たち―fallen woman―の系譜」という授業も受講し、ヴィクトリア時代における堕ちた女の集大成の作品として『ダーバヴィル家のテス』の紹介を受けました。

このようにして、２年次から併せてハーディの主要作品『ジュード』、『テス』、『帰郷』という三大悲劇と運命的な出会いを果たしたのです。どの作品も、陰鬱でドロドロジメジメしており、と同時に不思議な魅力をも放っている作品にふれることで、ハーディに対するより強い興味が湧いていきました。ハーディの描く世界は全て悲劇なのだろうか？果たして喜劇を書いたことはないのか？こうして私は知らず知らずのうちにハーディの虜にされてしまい、そして導かれていきました。一度虜になると、容易には離れられない深みにはまってしまいます。授業以外に喜劇や田園･牧歌的な作品、センセーショナル・ノベルや詩劇等など、彼の一作品一作品に出会うたびごとに驚き、そしてジャンルの広さに、何度も新たな気持ちで作品の世界にとらわれていきました。

４年次で修士課程に進学することを決めたとき、当然ながら私の専門研究の対象はハーディとなりました。４年次からお世話になっていた教授の指導のもと、修士課程でハーディ研究を本格的に始めました。

修士課程２年間の間、私はハーディの代表作を精読することで、作品の内側からハーディを理解していき、また各作品についての評論や批評理論を読むことで、今度は作品の外側からもハーディを学んでいきました。修士論文では『ジュード』の作品分析に挑みましたが、この作品があまりに難解であったため、表層的な分析を超えることができずに終わってしまったと思います。このことが気になり、博士課程に進学を決めると共に研究テーマを絞り、ハーディの作品全体を横断してヒロインの教育を中心とした研究に取り組み始め、現在に至ります。

私は、その研究成果として、ハーディ学会大会で２回の口頭発表の機会を得ました。１回目の2006年の大阪での発表では、ハーディ作品ではあまり目立たなく、かつハーディ作品中唯一のコメディである『エセルバータの手』の中の教育に関することについて発表し、その発表原稿は学報に掲載させていただきました。２回目の2008年の金沢での発表では、教育を人間の内側からわきおこる自然の一部と位置づけ、『帰郷』における自然について論じました。この発表では、作品もメジャーであるため、質疑応答の際、会場の先生方から様々なご意見、ご質問をいただきました。ハーディ作品の最大の魅力の一つは、中毒性の強さのようなものと思います。作品に加え、彼の数ある伝記―なかには妻の名を借りつつ、ハーディ自らが書いた自伝も含む―の中の事実と小説の世界を照らし合わせてみることで、各小説の見方がまた変わってくるのです。こんな多面的なハーディとの出会いを、私の以降の研究の方向性を決めることとなった運命と捉え、今後もライフワークとして、研究を続けていきたいというのが現在の私の気持ちです。研究テーマが少しずつ変化していったとしても、ハーディの残した功績自体は何ら変わることはありません。

最後になりましたが、数えきれない先生との出会い、そしてその多くの先生方の指導のもと、恵まれた環境で今までハーディ研究を続けられることにとても感謝しております。そして、私の楽しく苦しい研究はこれからも続きますので、ご指導、ご鞭撻をよろしくお願い致します。

ハーディと私

藤　田　晃　代

普段こういうことはまずないのだが、以前TVを流したままハーディの詩を読んでいたら、画面の向こうで話す人物（報道番組に出演中の政治家だったと思う）の話し声とハーディの詩のリズムが重なって聞こえてきて驚いたことがあった。現代日本語とヴィクトリア朝の英語のリズムが重なって響くのも、言葉という究極の音楽がなせるわざであろう。ハーディの詩はスピーチ・リズムがうまく取り入れられ、読むたびに詩の本質は音声であることを痛感させられる。私はこれまで詩を正確に読めるようになりたいと願い、いろいろ読んでは意味を調べるという作業を繰り返してきたが、ある時少しでも読める度合いを上げたいと思いきって音読を試みたらかなり調子のよいリズムになることを知った。人前ではやりにくいが、さらに詩に節をつけてうたってみた。すると詩はたしかにうたになった。詩はうたであることを掴める瞬間が来た。私はこれまでヴィクトリア朝の小説を研究してきたが、詩に関心が移行してからずっとエミリ・ブロンテの詩に格別の思いを持っている。エミリの詩について、いくつか論文を書かせていただいたが、研究をすすめるうち行き着いた一つの結論は、詩はうたであり音楽であるということだ。詩作のみならず、エミリは音楽に強い関心を持っていた。ピアノの楽曲を弾きこなし、詩作にあたっては常に詩神ミューズを求め続けた。エミリの詩には多くの音楽テーマが用いられるが、それら音楽テーマを経てやがてエミリは自ら詩人の声を獲得することで自身ミューズとなることを選んだ。

私はハーディの作品をまだ十分に読み込んでいないが、ハーディの作品にも音楽主題が多く用いられていることと思う。前述のエミリ・ブロンテの詩が本格的に編集され出版されたのは20世紀に入ってからであるが、1908年版のエミリ・ブロンテ詩集を晩年のハーディは持っていた。ハーディが晩年、その詩集を手にしたころすでに一時代前のミューズとなっていたエミリ・ブロンテから詩はうたであり音楽であることの本質を思い起こしていたのだろうか。ブロンテ、ハーディのみならず、ヴィクトリア朝の作家の多くが散文と同時に詩を多く残していることは作家たちが言葉の本質を示してくれる詩の存在意義を知っていたからもしれない。今日では、コミュニケーション重視が叫ばれ、ツールとしての英語学習がますます盛んになる一方で、フレーズやキャッチコピーを繰り返すだけの一部メディアの氾濫や明快さを求めるあまり、ものごとを単純化して表現してしまいがちになる風潮があるが、改めて詩の存在意義にさらなる焦点をあててもよいのではないか。その多義性、多様性ゆえに詩の言葉は生きていると感じられる。21世紀に生きる私がハーディの詩を読んでそのリズムや音楽性をとらえると同時に言葉にこめられたさまざまな解釈に思いをめぐらすとき、時代を超えて何か「つながり」を感じずにはいられなくなる。

とはいっても、ハーディの言葉は英語、私は外国語として英語を学ぶ身であるから詩を読む際には常に肝心の英語学習を並行して続けなければならないと自分に言い聞かせている。わかったつもりになるくらいなら辞書で単語や語法を調べるようにしているが、気をつけなければならないのは、簡単な単語に思わぬ意味があるのを“発見”することだ。まだ大学生だった頃、ハーディの作品をやっとの思いで読んでいた当時、難しい単語を知るだけでなく、知っているはずの単語に思わぬ意味があって新鮮さを感じると同時にまだまだ自分の英語力の不足を認識する毎日だ

ったが、外国語である限り、学ぶことは終わりがないと思う。よく言われることだが、初心を忘れてはならないとは事実だと感じる。初めて読んだハーディの作品は『森に住む人々』だったが読み進むのにたいへん苦労しながらも、これが作家による言葉の芸術だと思うと途中で投げ出せなくなり、難解ながらも引き込まれていったことを思い出す。そのときのペーパーバックは今でも部屋に置いてあるが、英文学を研究し、英語を教える側になってからも英語学習での読むことの重要性を伝えている。長文ときいただけで敬遠する学生もいるが、根気強く続けなければ、と考えている。

言葉の音楽性から書き始めたのに、長文読解の話になってしまったが、話し言葉と書き言葉は連動しており、互いに補完しあう関係にあると感じる。詩を読むにあたっては、ひとつひとつの語だけでなく、各連の関係や特定の言葉の用いられ方などを韻律と同時に注意して見ていかなければならないからだ。ハーディの詩も読んでいくうちにスピーチ・リズムのみならずいろいろなことが新たにわかるかもしれない。学生の頃と異なり、なかなかまとまった時間も取りにくくなってきているが、ハーディの作品をさらに詳細に理解できるよう研鑽を積んでいきたい。

≪シンポジウム予告≫

「ハーディとカントリーハウスの伝統」

イントロダクション

金　子　幸　男

カントリーハウスを論じた書物は巷にあふれているが、それがハーディとの関係で論じられたことはまだあまりない。田舎に君臨する上流階級の住まいとしてのカントリーハウスの伝統の中に、ハーディを位置づけようというのが今回のシンポジウムの狙いであるが、ハーディの輪郭を浮かび上がらせるために、カントリー・ハウスを中心にすえた他の作家、ジェイン・オースティン、ブラッドン夫人、E.M.フォースターを同時に取りあげる。各作家の作品を、18世紀末から20世紀初めまでのカントリーハウスの社会的・文化的意味の変化と関係づける中で、ハーディを「イングランドを継ぐ者は誰か」というイングリッシュネスの問題を扱った一連の作家の中に位置づけてゆきたい。

オースティンとカントリーハウスの伝統

坂　田　薫　子

ジェイン・オースティンの作品に登場する邸宅、及びその邸宅を内包する地所は、その持ち主や住人の人物像を体現していると見なされることが多い。また、ヒーローの住む邸宅や地所が、彼の優れたモラルを象徴するだけでなく、伝統的、保守的イギリスの優れた性質や価値観を体現する場所となっていることがある。例えば『高慢と偏見』のペンバリーは、エリザベスにダーシーの真の姿を垣間見させる場所であり、『エマ』のドンウェル・アベイは、エマに理想の「イングリッシュネス」とは何かを考えさせる場所となっている。しかしこうしたカントリーハウスの理想性も、後期作品になると揺らぎ始める。オースティンとカントリーハウスの伝統を考える

とき、カントリーハウスに誰が住むのか、その財源はどこか、などが大きな問題となると考えられるので、今回の発表では、こうした点に特に注意を払いながら、後期作品である『マンスフィールド・パーク』と『説得』を中心に、オースティン作品におけるカントリーハウスの伝統を考えていきたいと思う。

センセーション・ノヴェルと相続の（不）可能性

永　富　友　海

Hardyは、処女作*Desperate Remedies*において、重婚、殺人、アイデンティティのすり替え等々、センセーショナルなテーマを過剰に詰め込みすぎたきらいはあるものの、すべての謎の根源にillegitimacyを潜ませた点で、センセーション・ノヴェルの領袖たるWilkie Collinsの手法を正しく模倣したといえるだろう。出生に関する秘密を起源とするナラティヴが行き着く先は、誰が土地、屋敷、財産を相続するのかという問題である。センセーション・ノヴェルが秘める転覆的な力の一端はしたがって、エンディングのあり方に現れるといっても過言ではない。*Desperate Remedies*のエンディングは、Collinsの作品同様、実は興味深い問題を孕んではいるものの、相続するにもっともふさわしいと思われる次世代の人物の手に屋敷と財産が渡っていくことを保証する。だが、M. E. Braddonの*Lady Audley's Secret*は、その定式には当てはまらない。Audley Courtの相続と繁栄を可能にするプロットは容易に手に入ったはずなのに、作者はその可能性を選択しなかった。本発表では、相続という見地から、センセーション・ノヴェルの特性を探ってみたい。

イングリッシュネスと階級
――『エセルバータの手』と『微温の人』のカントリーハウス――

金　子　幸　男

『エセルバータの手』の中で、ネイ氏のヘアフィールド・パークは敷地だけがあって屋敷のない、人の住まないカントリーハウスである。ゴシックとクラシックの否定的な折衷として描かれるマウントクレア卿のリチワース・コートは、下層階級のエセルバータと貴族マウントクレア卿の間の、求愛と秘密の暴露をめぐる、シーソー的な力関係がよく表れている場所であるが、風景改造や密漁者の取り締まりやエセルバータの逃走の阻止という卿の権力の誇示にも関わらず、最終的にはエセルバータが囚人ではなく有能な土地屋敷の管理人となることで終わる。『微温の人』のド・スタンシー城は、所有者が、借金で首が回らなくなった貴族から鉄道成金の父親とその相続人ポーラ・パワーという中産階級へと変化する。しかし、ゴシックの城の修復による貴族階級の威厳を獲得しようというポーラの試みは、私生児ウィリアム・デアによって城が放火され廃墟となることで挫折し、代わりにポーラは夫サマセットとともに近代的な家を建てて住むことになる。本発表では、カントリーハウスに「住む/住まないこと」の意味と、階級に注目しながら、ハーディをイングリッシュネスを論じた作家としてみてゆく。

『ハワーズ・エンド』における中産階級のカントリーハウス

田　中　雅　子

『ハワーズ・エンド』のモデルとなったルックスネストの屋敷は、上流階級の大邸宅ではなく、中産階級のコンパクトな田舎の屋敷である。この屋敷や周りの自然は、土着の歴史を持ち、生命力にあふれ、まるで生きているものであるかのように存在感をもって描かれている。物語は、この屋敷の後継者になるのは誰かという問題をめぐり展開するが、この屋敷が「世界の海に浮かぶブリテン島」としてのイメージと結び付けられる時、イギリスの将来を誰が担うのかという問題がクローズアップされてくる。主人公マーガレットは、文化的で精神的に豊かな生活を享受しているが、それを可能にしているのは母親の遺産であることを認め、「お金という島」に立っている自分の足元を自覚している。作者は、屋敷とブリテン島のイメージを重ねることで、大英帝国が植民地主義による富の流れによって支えられてきたこと、またそうした足元がもはや続かないものであることを示唆している。イングリッシュネスの表象としてのカントリーハウスによって、衰えつつあった大英帝国の将来と、土地開発の波で失われる田舎の風景という問題について、作者がどう答えようとしているのか明らかにしてみたい。

内外ニュース

2005年刊行を企画された『トマス・ハーディ全集』は大阪教育図書より昨年６月から配本されています。既に配本された６冊と今秋配本予定の２冊をご紹介します。

第３巻『青い瞳』土屋倭子　訳（2009年６月配本）
第９巻『塔の上の二人』塩谷清人　訳（2009年６月配本）
第５巻『エセルバータの手』大榎茂行　訳（2009年11月配本）
第１巻『窮余の策』福岡忠雄　訳（2009年11月配本）
第10巻『キャスタブリッジの町長』鮎澤乗光　訳（2010年４月配本）
第15-2巻『詩集Ⅱ』森松健介　訳（2010年４月配本）
第15-1巻『詩集Ⅰ』内田能嗣、押本年眞、前田淑江、渡千鶴子他訳（2010年秋配本予定）
第13巻『日陰者ジュード』藤田繁　訳（2010年秋配本予定）

編集後記

協会ニュース第68号をお届けします。ご多忙のところ原稿をお寄せいただいた先生方には深く感謝いたします。また、今回より協会ニュースの発行日を１ヶ月早くするのに伴い、原稿締切日も従来より早くなり大変ご迷惑をおかけしました。

次号より新任の編集者が担当します。この２年間不慣れな私がなんとか役目を果たせたのも、事務局をはじめとする皆様方のご協力のおかげです。ありがとうございました。次号は４月発行の予定です。論文・随筆は2,000字程度、短信・個人消息は500字を目安にお書きください。原稿の締め切りは２月20日となっていますが、原稿は今度の大会で発表されます新しい編集者宛にお送りください。